

日本に於ける儒教の順應性

文學博士 白鳥庫吉

今夕私が本會に於きまして平生の考を述べる機會を得ましたのは洵に光榮に存する次第でございます。演題は只今加藤玄智君から御話がありました通りでございますが、實は何と致して宜しいのか、適當な言葉を得ませんでしたから、加藤君に題をつけて頂いたやうな譯でございます。私の申上げたいと思ひます主要の點は、日本の國體と支那の國體との間にどういふ異同があるか、又た儒教と云ふものが我國に大なる影響を與へて居るが、其の儒教が、支那に生れたものであるにも拘らず我が國に斯の如く行はれたのは何う云ふ理由であるかといふことでありまして、此等の點に就いて簡單に卑見を申述べたいと思ふのであります。

私が申す迄もないことでございますが、今日我が國では學問に従事する人は別と致しまして、實社會に活動してゐる人々は學問上の話に就いても實社會に直接の關係のある事柄は興味を以て聽きますが、現代を離るゝこと遠き古の話になると、現在の生活とは沒交渉の如く考へて、兎角これを疎外するやうになつて居りはせぬかと思はれます。併ながら吾々歴史を専門とする者から見ると、太古の事と雖も現

時に密接なる關係を有するものであつて、現代を十分に解釋しようと云ふには矢張り其の國の昔に溯つて源流を明かにしなければならぬ、然らざれば現時の真相を窺ふことが出來ないのであります、私は深く之を信じて疑はないのであります。三つ兒の魂百までもと云ふ謬もあります通り、老年の人の性質を知らうと云ふには、矢張り子供の時分からの性質を辨へんければならないのと同じことであらうと思ふ。さういふ譯でありますから、多くの文明を吸収して國の狀態が複雑になつて居る今日の日本のみを見たのでは日本の國體の眞髓を窺ふことが出來ず、又た支那の今日のみを見て支那人の國民性、支那の國體の精粹を知ることが困難であります。それよりも日本の極くの初、外國の影響の少かつた時のこと、支那に於ても矢張り其の通り、すつと上代の有様を調べると、却つて日本支那の國民性が比較的に知られる場合が多からうと思ふのであります。そこで私は此の兩國の國體を明にするに就いて先づ日本人の上代の宗教、また支那の古代に於て發生したる儒教の性質を講究して見ませう。

日本の國には宗教はない、斯う云ふことを或一派の人は申します。即ち吾々の信ずるものは宗教でないこと云ふ風に言つて、無宗教であることを誇りとして居る一派の論者があるやうに見うけます。日本人が外國へ行つて、お前の宗教は何だと云はれると、私は無宗教であるといつてゐる。けれども吾々は本當に宗教を有たないのであらうか。大和魂、或は又た其の大和魂を支配して居る不思議なる力に信念を置いて居るのは即ち宗教では無からうか。もしさうとすれば日本人は無宗教であると公言して憚らない

のは甚だ訝しい次第であります。無宗教だと公言してゐる人々は宗教といふと先づ佛教を念頭に浮べるさうして其の佛教、もしくは佛教臭味のあるのを嫌ふために無宗教を以て自ら誇るのであらうと思ふ。又た一つは、我が國には獨特の精神があるが、それは宗教でない、外國で宗教といふのとは性質が異つてゐる、斯う云ふ意味で無宗教だといふ人もあるかも知れませぬ。けれども私の目から觀れば、日本人の信念は廣き意味に於ける宗教である。太古の時代から確乎たる信念を有つてゐて其の信念が國體の骨子となり基礎となつて、國家が隆盛となり、又た外から入つて來る文化は皆な此の信念を中心として結合し、此の信念によつて國民の文化が發達したとすれば吾々は確に一つの宗教を有つて居るのである。さすれど吾々は宗教がないと云ふことを以て内外に誇るべきではなからうと思ふのであります。

然らば吾々の宗教は何であるかと云へば、皇室が其の本源であります。即ち皇祖天照大神を以て吾々の宗教の本尊とするのであつてこれが上古からの信念であり、これによつて吾々の大和魂、吾々の國民的精神が涵養せられたのであります。吾々が國民として存在するのは政治があるからであります。我が國語では其の政治のことを「マツリゴト」と云ふ。「マツリゴト」のもとの意味は、私が申す迄もなく、神に事へること、神を奉祀することであつて、其の「マツリゴト」が政治の意味にも用ゐられるやうになつたのは、我が國の政治が神裁政治であるからである。神に依つて吾々國民の凡ての事が規定せられたのであります。此の如く政治が神裁政治、即ち宗教的政治であるのを見ても、吾々は元から宗教を有つて

居つたことが證せられるであらうと思ふ。支那風の官制が定められた時も神祇官が太政官の上に置かれましたが、これも吾々の宗教的信念が決して動搖しなかつた證據であります。かういふ風に日本國民の信念の根本は動かない。動かないからして支那から儒教が來ればこれを其の根本に結付けて、差支ない限り支那の思想を採り、制度を採り、印度の國から佛教が來れば、やはり差支ない限りに於て其の教を採つた。これがために我が國の精神界が豊富になつたが、外國から來た思想或は制度に依つて吾々日本國民の根本精神と云ふものは失せないものである。固有の信念は大黒柱の如くに立つて居る。これは此の信念が記録のない大古から確乎として存在したからのことであつて、其の淵源は實に遠くして且つ深いのであります。

今日吾々の國が此の如く隆盛になつたと云ふのは無論此の固有の精神ばかりに因るのではなく、外國の思想文化をよく採つたためである。世界に隨分國は多いけれども、我が國の如く外國人の長處を憚りなく採用する所は殆ど其の類を見ないであらうと思ふ。けれども吾々日本人は我が國體に背くやうなものとは採らない。國民的精神を動かして根本的にそれを覆すと云ふやうなものは採らない。例へばマホメット教などは我國に輸入せられなかつた。マホメット教は東洋の方にも隨分播つて來たので隣國の支那に於ては回教徒即ちマホメット教徒の數は非常なものである。すぐ隣國にそんなに回教が傳播して居るに拘らず、我が國には殆ど一人として——一人や二人はあるかも知れぬが、先づ殆ど無いと言つて宜い

位である。また婆羅門教は印度に於て佛教と並んで盛なものであつて、今日ではヒンドゥー教となつて印度の宗教界を支配して居る。けれども吾々は其の婆羅門教を輸入しない。それから耶蘇教は西洋人と接觸して以來、足利の末から徳川の初にかけて盛であつたけれども、これも悉く亡びた。近來に及んで再び入つて來た耶蘇教は随分擴がつてゐるやうであるけれども、併ながら耶蘇教が我國にどの位精神的に其根を生やし、どの位我が國民の思想に結付けられて居るかと思ふことは大なる疑問であらうと思ふ。此等の宗教が我が國に入らず、入つても根據を深くすることが出來ないのに、獨り儒教と佛教とが我が國に入つて大なる勢力を得て來たと云ふのは何う云ふ譯であるかと云ふと、是れは私などの歴史家よりはこゝにお集まりの宗教専門の方々に御考があることと思ひますが、併し歴史の方からの觀察を申上げるとも無益では無からうと思ふのであります。

佛教が實際日本に入つたのは欽明天皇の時代であります。其の前からあつたらしいけれども、活動し始めたのは此の時代である。それから奈良平安の朝に至つて、益々盛になり、其の後と雖も吾々の祖先に依つて深く信仰されたと思ふことは争ふべからざる事實であります。けれども佛教が日本に入つてなせ其れだけの勢力を得たかといふと、佛教を入れても、日本の國體に邪魔をしないからである。と云ふのは日本に入つて來た佛教は御承知の通りに大乘佛教であつて、本體と云ふものを立ててそれから萬法が開發する、神も佛も其の顯現であると説いてゐるのであるから、甚だ彈力に富んだものである。だから

ら日本に來れば直ちに本地垂迹と云ふ様な説明をして、我國の天照大神も皇室もみな此の本體に結付けるに少しも矛盾する處がないのであります。特に我が國に入つた佛教は、中央亞細亞を經、支那を經、或は又た朝鮮をも經て來て餘程普通的になつてゐて、印度的特質の薄らいだものであつたから、我國で之れを攝取するにも都合がよかつたのであらうと思ひます。たゞ佛教の性質たるや餘程高遠にして且つ抽象的であるから、其の根本思想を我が國民の信念に結び付けるについては困難なる場合が多かつたらうと思ひます。今日佛教の振はなくなつたのも原因がこゝにあるであらうと思ふ。けれども亞細亞大陸に於て發生した大きな宗教の中で佛教のみが兎も角も我が國に廣く行はれて思想界に大なる影響を與へたと云ふことはそれが我が國體に調和するやうに出來てゐたからであります。

次に支那の儒教であります。是れは餘程根柢が深く我が國に植付けられてゐる。儒教は佛教よりも早く入り、今日もなほ生命を有つてゐる。畏多くも明治天皇が我が國民一般に賜はつた教育勅語も其一語々々を研究玩味して見ると矢張儒教の旨に合する。少くとも其の御詞——「克ク忠ニ克ク孝ニ」とあり「父母ニ孝ニ、兄弟ニ友ニ、夫婦相和し、朋友相信じ」とあるなど、儒教の主旨に適合する所が多いと云ふことは誰人も否むことが出來ないであらうと思ふ。其の教育勅語は今後の吾々及び吾々の子孫を支配するところの大教訓として生きて居る。儒教が我が國に最も深き影響を與へてゐることはこれでも明であります。

然らば何が故に支那に生れた儒教が我が國に採用せられてさう深く國民思想に沁みわたつたかといふに是れには十分の理由がなくてはならぬことゝ考へるのであります。儒教の主旨は大體からいへば道德でありますけれども、其の裡には宗教的分子が含まれてゐる。其の思想の根柢には天と云ふものがある。論語ばかり見ると天と云ふことも少く、また怪力亂神を語らずと云ふこともありまして、宗教の方には縁が遠い様でありますけれども、論語ばかりが儒教ではない。儒教として吾々の祖先が講究したものは何かと云ふと、書經も詩經も禮記も皆な學んでゐる。儒教はそれらの經典に現はれてゐる思想を總稱した名であつて、獨り孔子や孟子の説のみを云ふのではない。それで儒教には道德と宗教との二方面があるが、道德的方面に於ては我が國民精神と一致してゐることは明かである。吾々日本人の道德思想が儒教の説く人倫五常の道と矛盾するところは無い。親に孝であるとか、君に忠であるとか、朋友相信するとか、夫婦相和すとか云ふやうな事柄は我が國でも當り前のことであるから雙方同じである。けれども宗教上の點に於ては支那人の信念と吾々日本人の信念とが果して能く一致し得るものであるか。これが疑問であつて、特にそれが政治の上に現はれた國體の觀念に於いて我が國と支那とは大なる差異がありはせぬかと云ふのがこれまでの儒者の最も憂へた處であります。

我が國の國體は支那の國體とは違ふ。これは儒者自身も世人の多くも言つて居ることである。國體と云ふのは普通にいふ政體とは違つて、もつと深い意味、即ち國家存在の根本精神といふやうな觀念が含

まれてゐて、そこに宗教的意味があるのである。西洋の方でそれに適當する言葉があるかどうか知りませぬが、日本では國體を以つてゐる。けれども何となく漠然たるところがあつて、誰でも了解してゐながら明白に其の概念を思ひ浮べることが一寸むづかしく、動もすると意味が混雜する。支那に於て先年革命があつて新たに中華民國となつて民主政體を取つた。そこで、儒教の本國が民主政體となつたから此の變動は同じく儒教を尊信してゐる我が國體にも何か障害があるので無いかといふ心配が起つた。

これは儒者の方でよほど困つた處であつたらしく、其の當時漢學先生は新聞とか雑誌とかでいろ／＼説明や言譯をしました。その説明はつまり支那では革命と云ふものがある。天命が下れば匹夫も皇帝となり、天命が去れば皇帝も匹夫となる。けれども日本は萬世一系の皇室を戴いてゐるから革命といふことは無い。皇室は天地と共に限りがない。だから日本と支那とは國體が全然違ふ。従つて支那が民主政體になつても、日本には何の影響も無いといふのである。儒者先生の方では支那の儒教は日本に行はれて日本人の思想を支配してゐるから、日本も支那も同一の政治思想、同一の宗教信念を有つて居るといひたいに違ないが、此の點ばかりは、さういふことが出来ない。儒者は大に困つた。今困まるのみならず昔から困つてゐたのである。儒教の經典の中でも論語は此の點に於て最も難のないものである。これは道徳上の教であるから革命問題には觸れない。我が國に於て論語が最もよく用ゐられたのはこれがためである。けれども孟子になると明に革命思想を鼓吹してゐるから我が國民に讀ませてはならぬ杯と言ふ先

生までありました。しかし此の儒教でいふ革命はそんなに日本にとつて恐ろしいものでありませうか、一體、日本と支那との國體、國家存立の根本精神に關する信念はそれほど相容れざるものでありませうか。これが問題であります。

先年私は支那の古傳説を研究しまして、堯舜禹傳説の解釋を公にしたことがあります。支那人の最も尊崇する聖人、堯とか舜とか禹と云ふ古の天子は果して今まで普通に信せられてゐるやうに歴史的人物であるかどうかと云ふことを記録の上からいろいろ研究したところが、これは決して實在の人物ではなく、理想的帝王として支那人の信念から生れ出たものであるといふ結論を得たので、それを或る公會の席上で述べたのであります。それがために儒者、又は儒教を尊崇する方々から、私が堯舜を抹殺したといふので大に非難を受けました。只今でもなほ非難を受けて居るかも知れませぬ。けれども、是れは兒島高德が有るとか無いとか云ふのとは違ふ。私の説によると歴史的人物としての堯舜禹はなくなつて來るが、理想的人物として堯舜禹をつくり出した思想は上代の支那人の間に實際にあつたと云ふことになるので、歴史的人物と見るよりは二層確實な基礎を堯舜禹に與へたのであります。ですから私から言へば此の考は儒教をして益、生命あらしめるのである。今迄の人は、堯舜禹を去ること四千年以前に生れてさうして死んだ帝王であると云ふ。私の説にすれば(時代は少し新しくなるが)支那人が帝王の理想としてそれを生み出し、また後世までも支那人の頭のなかに嚴然として存在してゐる、換言すれば儒教

の精神が此の三人の人格になつて現はれ、儒教のある限り此の人格が生きてゐると説くのであるから、儒教の根柢が崩れるところではなく、却つて益々確實なる基礎を得ることになるのである。だから私は儒教の敵ではない、儒教の擁護者である。かういふ風に私自身は考へて居るのであります。

けれども世間ではたゞ私が今まで人の信じてゐた堯舜禹を抹殺したといつて非難します。しかし、物事の真相を理解するのは冷静な態度で學術的分解を加へなければなりません。さうして、初から一種の感情、或は成心があつては眞の分解をすることが出来ない。儒教に就いても舊來の傳説は何でも動かすまいとか、諺にもいふ我が佛を尊くしようとかいふやうな考があれば眞の學術的分解といふことは出来ない。むしろ冷静に公平に研究してゆくと、却つて其の裡から眞の尊いところが現はれ、儒教の價値が發揮せられる。そこで始めて儒教の精神が生きて來るものである。すべて世の中のこととは感情ばかりで出來るものではない。

一方に於ては、理性がある。其の理性によつて形づくられた知識がある。此の知識によつて眞のはたらきができる。此處に居られる高木男爵が先達申されたことに就いても感じて居りますが、戦争をするのでも其の通りである。日露の戦争、日清の戦争に勝利を得たのは申すまでもなく吾々國民の精神、大和魂が心棒となつてゐるけれども一方に於ては精密な機械を作り、またそれを運轉する知識を要する、或はそれを作り出す資本を得るにも知識を要する。それが無くては戦争も出來ないであるから知識と精

神との兩力が結付かなければ今日の競争場裡に勝を制することは出来ない。そこで宗教のことも道德のことも、たゞ感情ばかりで我が佛、我が教を尊くしようとしても、知識に於いて虚偽であることが發見せらるれば何にもならぬ。我が國體を論ずるにしても、たゞ尊嚴であり、美であるとはかり感情的にいつたのでは知識あるものは承知しない。國體の精髓を示してある神典を學術的に分解研究して、其の美であり尊嚴である眞の理由を理性の上から明にしなければならぬ。支那の國民性を知らうとするにも同様で支那人の理想とする堯舜禹を根本的に分解して何處に眞の精神があるかと云ふことを知らなければならぬと思ふ。さういふ考から、私は堯舜禹の研究をして前に申し述べたやうな結論を得たのであります。さて堯舜禹に現はれてゐる支那人の儒教の精神は何であるかと云ふと、天が百姓の中に於て最も有徳な者、天の意志を行ふに足る者を擇んで其れに命を下し、天の代理者として人民を支配させるといふので、其の命の下つたものが即ち皇帝である。だから皇帝となるものに門閥も特別の地位もない、たゞ天の命を十分實行し得る人であればよいのである。舜は田夫野人から天子になつたのである。さうして其の天の意志といふのは天の萬物を育成する如く、天に代つて人民を愛撫して治めてゆくこと云ふのである。だから若し其の人が人民を愛育しない時には天の命は忽ち去つてしまふ。さうすると今までの天子は直に匹夫となる。さうして他の有徳な者に天命が下つて其の人が天子になる。故に實際は兎に角、思想としては支那の國の天子は天の代人であつて、眞に人民を支配するものは天自身である。だから如何に革

命が行はれて天子、即ち代理者が代つても眞の支配者即ち天は永久不易である。かういふのが支那の政治の根本精神であつて、それが即ち支那の國體であります。であるから、外國から入つて來た民族、例へば蒙古人にしても、或は滿洲人にしても、さういふ東夷北狄が支那を征服して君となつた場合でも、此の國體に順應しなければ即ち天の命を受けたと云はなければ支那人が治まらない。清朝を開いた努爾哈赤が滿洲から起つて明を滅ぼした時、天命と云ふ年號を立てた。それは支那人に對するにかういふ名を必要と考へたからである。も一つ最も好い例は康熙帝が天を祭るときに臣玄暉と云ふ語を用ゐた臣玄暉は彼の名であるが注意すべきことは此の臣の字である。即ち天に對して臣と稱したのである。此等を以つて見ても天と云ふ觀念が如何に支那人の思想を支配してゐるかといふことがわかる。一寸いひ加へて置きますが、支那人のいふ天は彼の蒼々たる、穹窿をなしてゐる天であつて、其の天に一つのスピリットがあると考へるのである。是れは西洋の學者の云ふアニミズムであつて、人間の様な神があるとは思はない。吾々の上を覆うてゐる蒼天其のものにスピリットがあつて、其の天が吾々を支配すると云ふのが支那の思想であるところが其の代理者たる天子は人間である。これもまた神ではなく、堯舜のやうな聖人でも、やはり人である。それを神にしないとところが支那人の特質である。しかしそれは兎も角も、支那人の眞の君主は天であつて天子は其の代理者である、革命は代理者に關係したことであつて、天自身は永久不易であるといふことは段々申し述べて來たところで御了解になつたことと存じます。

さて支那の國體をかう考へて、それを日本の國體に比較するとどうなるかといふのが次の問題である。日本の國體の眞髓は神典に現はれてゐる。神典は日本書紀に於て神代史となつて居て、普通の人間の歴史とは違つたものとせられて居る。神代史であるからそれを人間の歴史として解釋することはできないのである。然るに世間多くは神典を以て普通の歴史と見てゐるらしいが、それは大間違ひである。一例を擧げてそれが歴史で無いことを申し述べようならば、かの天孫民族といふやうなことで、それがわかる。天孫が高天原から御降りになつたといふ神典の話を経史として解釋する場合には、高天原から實際人間が降る譯は無いから、それを地球上の或所と引き直ほして見る。さうして其の或る場所から此の國に來たのが即ち皇室を中心とする吾々の祖先であるといふので、それを天孫民族と名づける。これが世間で信せられてゐる歴史的解釋であります。然らば其の高天原は地上の何處かといふに、先づ天孫が高天原から何う云ふものを持つておいでになつたかと調べてみるも天叢雲劍、八尺瓊曲玉、八咫鏡などがあつた。それから高天原には蠶があり、機を織ることがあり、田畑を耕すことがあるから、これも天孫民族の故郷で行はれてゐたものと見なければならぬ。それだけ文化の進んで居る天孫民族の故郷がもし日本の附近にあるならば、それは支那の外には無い。滿洲は今でも野蠻である。朝鮮半島は三國の魏時代に於ても未開國である。何れも神典の高天原ほどな文化は無いのである。ところがもし果して高天原が支那だといふことになる、我が皇室并に我々の民族は支那人であると云ふ結論に到達せざるを得

ないのであります。これは第一言語などの實際に矛盾するのみならず、神聖なる神典がこんなことを説き示すとすれば甚だをかしい譯である。全體、日本民族の起源とか、人種上の位置とかいふ問題は解剖學とか、言語學とか云ふ方面から研究すべきことであつて、神典を文字通りに讀んでみると、そんな問題に觸れるところは何處にも無い。神典には高天原とあつて、朝鮮とも支那とも書いては無く、又た吾々の民族が高天原から來たとも書いて無い。其の他のことでも、もし神典を事實の歴史とすると悉く吾々の知識に矛盾する。さういふことをしないで文字通りに解釋すれば高天原は高い天であつて、天孫は皇室の御祖先である。高天原には天照大神がおいでになる。高いところ、光るところ、明るいところで萬物を成育させる本源である。高皇産靈神といふ神がある。物を産出する力である。瓊々杵尊といふ御名は饒々しく豊かなことを表してある。かう考へると、すべて矛盾なく、安らかに解釋せられる。さうして、其の全體を通じて皇室の本源、皇室と臣民との關係の由來が明に見えてゐる。だから神典は歴史では無く、吾々の祖先が皇室の尊嚴、君臣の分の紊るべからざること、即ち國體に對する信念、理想を述べたものであつて、支那の書經などと同じ性質のものである。さうして堯舜禹の傳説が歴史的事實では無いが、其の傳説の發生した支那人の理想は明確な事實であると同じく、神代史は歴史ではないが、それに現はれてゐる日本人の信念がどこまでもたしかな事實である。それが神典の尊いところであります。譬へば茲に探幽の畫があつて、仙人が龍に駕して雲の上を飛んで居る。甚だ面白い。そこに美があ

り、高尚な觀念もある。然るにあの仙人は空中を飛んで居るが、引力があるのに何うして空中が飛べるか、と言ふ人があつたならば、其の人は共に晝を論ずるに足らない者と云はなければならぬ。神典は神典として其處に莊嚴もあり美もあるのに、強てそれを歴史的事實と見ようとするのは恰も仙人の晝に向つて引力を論ずると一般である。

然らば此の神典に現はれてゐる日本人の信念はどういふものかといふと、先づ皇室と臣民とは其の本源が一つである、それが二つに分れて一は皇室となり、一は臣民となり、其の分が定まるといふのである。最初の天之御中主神、その次の高皇産靈神、これが萬物の本源、生産の力の本源である。それから伊弉諾、伊弉冉二神が國土神人を生まれる。ところが伊弉冉神が火の神を生まれて、めに黄泉國にゆかれた。さうして伊弉諾の神から生まれた天照大神が高天原に上り、素盞鳴命が黄泉國に行かれて、始めて高天原と黄泉國との相對が現はれ、天照大神の御子孫が皇室となり、素盞鳴命の子の大國主神が臣民となつてそれに服従するといふので、皇室と臣民との位置が定まり、君臣の分が決まつたのである。高天原は前にも申し述べた如く、天上の光明國で、すべての善いこと美しいことの本源であり、天照大神は萬物を成育させる光の顯現で慈愛の本源である。其の反對の黄泉國は地下の闇い穢い國で死者のゆくところである。ところが其の天照大神の御子孫が此の現し國たる豊葦原中國へ降臨せられて皇室となられたのであるから、皇室は即ち天それ自身である。黄泉國の系統を引いてゐる大國主神は、初から此の天

に服従すべき運命を有つてゐる。そこで支配する皇室と、支配せられる臣民との間には動かすべからざる尊卑の分界がある。神典の目的は無論此の現し國、即ち我が國家に於ける皇室と臣民との關係を述べて國體の眞髓を明にするためであるが、其の現し國に於ける君民の關係の由來を高天原即ち天と、黃泉國、即ち地下との關係に置いて、最初の源は一つであるけれども、それが、かういふ風に分れた以上、毫末も紊るべからざる分限が定まつてゐるとしたのが神典の最も大切な眼目であつて、これが即ち日本人の固い信念であります。かういふ風に我が國では天それ自身が皇室となられたのであるが、支那では天は天として存在し、其の代理者が天子として君臨する。又た我が國では天が神として人格ある天照大神及び其の御子孫の皇室としてあらはれるが支那では天は蒼々たる天として見られてゐる。其の點が違ふ。即ち形式が少し違ふけれども天其れ自身が人民を治めると云ふ根本の精神に於ては支那も日本も違ふ處はない。此の精神の表はれた國體其のものは全く同一であるといつてよろしいのであります。

それでありますから日本の皇室と支那の天子とを同列に置いて比較するのは大間違ひである。日本の皇室は支那の天と比較すべきものであつて、さう見ると兩國の國體は全く同一であるが、日本の皇室と支那の皇帝とを同じ地位のものとして間違つた比較をするから、國體が異るといふ話になつて來るのであります。それならば支那の天子に比較すべきものが日本にあるかといふと其れは將軍である。或は攝政關白といふやうなのでもよいが、將軍が最も適切であります。將軍は如何に勢力を有つて居つても

決して統治の權を握る譯には往かない。如何に源氏に力があつても、足利氏が盛になつても、また徳川氏が勢を振つても將軍として政治をするには必ず皇室から委任をうけなくてはならぬ。それは恰も支那の天子が天の命をうけて民を治めると同様である。さうして其の將軍の政治がよくない時には人民がそれに服従しない。其時には別の勢力あるものが皇室を奉戴して起り、不人望な將軍家に代る。さうすると皇室はそれに政治を委任せられる。それが丁度支那の天子に革命があると同じ關係である。かういふ風にして支那の帝室が常に易はるやうに將軍の家が屢々かはつたのである。しかし、支那に於いて天が永久である如く、將軍が如何にかはつても皇室は萬世一系で少しも動かないのであります。たゞ支那の天命は目に見えないものであるが日本では皇室が即ち天であるから、それが明に天皇の命としてあらはれるのである。

かういふ風に比較して來ると日本の皇室が萬世一系で天壤と共に窮まりなしと云ふことは當然である天であるから天が落ちて來ないと同じことである。又た支那にどれほど易世革命があつても天にかはりが無いと同じである。今まで日本の儒者先生は儒教には革命思想があるから困る／＼と云つて、孟子を讀むことはいかぬと云つた様な心配をしたのであるが、それは誤りである。實際儒教を吾々が奉じて少しも差支がない。儒教は我が國民の間によく行はれて、我が國民の精神に浸潤してゐるけれども、それがために我が國體は毫も動搖することが無く、却つて益々日本人固有の信念を鞏固にして來たといふの

も、儒教と我が國民の精神とが根本的に同一であるからである。佛教の衰へたる今日に於ても儒教がなほ生命を有つてゐるといふのもまた此の故であります。

日本と支那との國體は大體かういふ風でありますが、近頃支那では政體が變つて民主國となつた。それに就いて、民主々義は支那の昔からの精神であるといふやうに説くものもあります。なるほど天子が民意に背き、民のために不利なることをすれば、天命がその人を去つて革命が起る。けれども、それは天が人民を赤子の如くに愛するといふ根本思想から來るのであつて、人民を愛しないのは天意に背く故に天が命を革めるのである。政治の主體はどこまでも天であつて、決して人民では無い。従つてまた決して民主々義では無い。さういふ國體の下に幾千年間生活して來た支那人が、突然アメリカ式の民主政治を行はうとしても、容易に出來るもので無い。將來、さうなるにしても、それまでには餘程の曲折を要する。我が日本が立憲政體となつても、國體がどこまでもかはらないことは申すまでもありますまいから、それは別に述べませぬ。大分ながくなりましたから、この位に致して置きます。

